

## 積極的治療を望まなかつた患者に対する意志決定支援

その日私は、80代男性Aさんの診察に同席した。Aさんは、頸下部腫瘍の精査目的で紹介受診され、生検の結果、原発不明癌頸部リンパ節転移と診断されていた。すでに告知を受け、化学療法入院を予定したもの、コロナ感染により延期になっていた方だった。私は、当然治療に対する意思決定がでできていると思っていたので、延期になっていた入院日の調整をするだけのつもりで診察についていた。しかし、事態は予想外の展開になった。

奥様とともに診察室に入室したAさんは、ご自身のお気持ちを綴ったA4の用紙を持参され医師に手渡した。そこには、「来月から自治会長を務めることになり、引き継ぎ等で多忙になるため入院治療を辞退したい。できれば内服による自宅抗がん剤治療をお願いしたい。それが不可能ならば定期通院で経過を診ていただけでよい」という内容が書かれていた。内容を読んでいる医師に、今できる最善の治療はあえてしない、今の生活を壊したくないと、口頭でもはっきり意思表示された。予想外の展開に私の頭の中では、(え? どういうこと? 積極的治療を望まないということなのか? だとしたら、今後についてお気持ちを聞いておかないと。ACPが必要かな)と、次から次へと考えが巡った。医師も同じように考えを巡らせたような様子を見せ、一瞬の間を置いて私に目配せをしながら「ACP」と、小声で指示した。私が急いでACP用紙を準備し戻ってくると、医師からAさんには、治療をしなかった場合の予測される経過とACPについての説明が始まっていた。混乱した様子もなくうなずきながら聞いているAさんとは対照的に、奥様は説明の合間にも治療を受けてほしいとAさんを説得していた。そんな奥様にAさんは、「おまえは黙っとけ、これが自分の生き様だ」と苛立ちを見せていました。私はこのやりとりを見ていて、夫婦の思いにギャップがありすぎると感じ、このあとしっかりと時間を取り話したいと思った。

診察後、私は静かに話せる場所にAさん夫婦を案内し、改めて自己紹介をした。  
私はAさんに、診察時に話されたAさんのお気持ちを受けとめていることを伝え、なぜそういう決断に至ったのか尋ねてみた。するとAさんは、「入院が必要な治療も毎日通院が必要な放射線治療も、今の生活スタイルが崩れるでしょ、それが嫌。」とおっしゃった。さらに続けて、「毎日晚酌して寝る習慣なので、それができなくなって眠れなくなるのが不安だし、夜型の生活スタイルが変わることにも抵抗がある。足腰も弱ってきたから散歩を積極的に頑張っているけど、入院することでさらに弱るのではないかと不安。もう80過ぎて十分生きたから、今のスタイルを崩してまで治療したくない。このまま寿命を全うしたい。息子たちには、先生が勧める治療を受けていることにする。これが自分の生き様だと思っている」と一気に話された。治療を受けてほしいとAさんに訴えていた奥様は、Aさんの意思表示に圧倒された様子で、後半は黙ってAさんの言葉をじっと聞いておられた。私も聞いていて、圧倒されるほどの強い意思を感じた。ご自身で熟考したうえでの決断なのだろうと推察し、お気持ちを尊重したいとも思った。けれども、一点だけ引っかかることがあった。息子さんに話すつもりがないことだ。私は、息子さんも含めて話し合うことで、Aさんのお気持ちが変わる可能性はあるような気がしていたので、強い意思を持って話してくださったAさんの気持ちを受け止めると同時に、息子さんに話すべきではないかという自分の気持ちは伝えておこうと考えた。自分と同じ世代であろう息子さんに自分の気持ちを重ねて、「私がAさんの子どもなら、絶対に話してほしい。治療を受けていると思っていたのに実は違っていた、親がどんな気持ちで病気と向き合ってきたのか後で知るなんて、そんな悲しいことはない。Aさんのお気持ちを伝えたうえで、息子さんの気持ちも聞いてあげてほしい」と伝えてACP用紙



を渡した。私は気持ちが入りすぎて思わず泣きそうになったが、ぐっとこらえた。Aさんは、「病気になる前から、『これから先の生き方をそろそろ考えないと』と思っていたけど、家だとなかなか真剣に話せないから先延ばしにしているうちに病気になっちゃって。今日この場で話す機会を作つてもらって本当によかったです。今日話したことは妻にも初めて話します。妻は病気がわかってから、一方的に治療しろと言って自分の話を聴こうとしなかった」と清々しい表情でおっしゃった。私は、自分という第三者がいることで、お互い感情的にならず冷静に気持ちを伝えることができたのかもしれない」と、この場を作つて本当によかったと思った。

そのあと私は、看護記録を書きながらその場面を振り返った。息子さんに話すつもりのなかったAさんに、自分の考えを押しつけるような言い方をしてしまったのではないか。がん治療という人生を左右する選択について、出すすぎたことを言ってしまったのではないかという不安を抱きながら、どう伝えればよかったのか、ずっと考えていた。そして1週間後、答えが出ないまま次の診察日がやってきた。



私は、Aさんのお気持ちに変化があったのか気になりながら診察に同席した。体調を確認しながらお気持ちを伺った医師にAさんは、「息子と話し合つて、孫娘の嫁入りを見届けてほしいと言われました。目標ができちゃいました」とおっしゃった。そして、「この1週間じっくり考えることができて本当によかったです。先生が勧めてくださる治療を受けようと思います」と意思表示され、私にも笑顔を向けてくださいました。診察に同席してこんなに嬉しい瞬間がこれまであつただろうか。1週間のもやもやが一気に晴れた瞬間だった。

Aさんの治療開始から数ヶ月経過したのだが、その後私は、外来でAさんに一度もお会いできていない。勤務の都合もあるのだが、Aさんの外来日を意識できていなかつたというべきだろう。最近、そのことに気づくきっかけがあつた。ある同僚が、「Aさん、すごく会いたがつてたけど会えた?とてもお世話になつたと言つていて、感謝の気持ちがものすごく伝わってきたから、良い関わりをしたのだろうなと思ってたよ」と教えてくれた。私は、治療開始後のAさんを気にかけることができていなかつた。外来日に声かけができるようにするには、自分が意識して行動しなければならないと気づいた。私は、Aさんが治療に意欲を見せてくれたことで満足してしまつていたのかもしれない。そこからが始まりなのだということを忘れず、外来という短い時間の関わりでも、継続して気にかけることが看護であると気づかされた事例だつた。